

琉球大学学術リポジトリ

日韓の礼儀と異文化コミュニケーション

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 琉球大学教養部 公開日: 2009-12-15 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 兼本, 円, Kanemoto, Madoka メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/13928

日韓の礼儀と異文化コミュニケーション

兼 本 円

1. はじめに

「郷に入っては郷に従え」は異文化コミュニケーションの格言の中の代表格とも言えるが、具体的には「異文化に入ればその文化の礼儀と習慣に従え」を意味する。しかし、異文化の礼儀に従うことは言うは易く行うは難しである。一般に容易だと思われる理由は、礼儀の定義が単に広辞苑に記される通りに「敬意を表わす作法」とのみ理解されているからである。礼儀は相手を敬う心さえあれば自然に表れると思われているのだ。さらに敬意を表わす作法には文化による大きな違いはないだろうとの思い込みにも繋がるようだ（「言葉は違って音楽で分かりあえる」の思い込みに似てはいないか）。また、一般的に礼儀イコール儀礼・虚礼のように意識されていて、異文化コミュニケーション研究の中でも充分注目されていない。しかし、文化の定義の中で礼儀を捉え直してみると礼儀の持つ異文化コミュニケーション上の重要性が明らかになる。石井・岡部・久米（1991）によれば、文化とは「ある集団のメンバーによって幾世代にもわたって獲得され蓄積された知識、経験、信念、価値観、態度、社会階層、宗教、役割、時間空間関係、宇宙観、物質所有観といった諸相の集大成であるといえよう」（42頁）。この幾世代にわたって獲得された文化は無意識のレベルに織り込まれて伝承されていく。このプロセスをホールは「文化はコミュニケーションである」（1979）と定義している。礼儀もコミュニケーションを通して無意識のレベルに織り込まれて獲得されるに違いない。よって、異文化コミュニケーション中に生ずる誤解は礼儀の衝突が原因であることが多い。しかし、この種のコンフリクトは無意識の中の衝突であることが多いため具体的に何と何が衝突しているか当事者同士自覚できない状態で、さまざまな誤解を生む。ならば、礼儀の問題は「礼儀のレベルの問題」として一掃されるのではなく、異文化コミュニケーションそのものの問題と捉え直されるべきである。

本論文の目的は韓国と日本の礼儀の違いが日韓のコミュニケーションに及ぼ

す影響を考察することにある。考察の資料は日本または韓国に一年以上長期滞在した者達が異文化コミュニケーションを通して得た礼儀に関する所見である。

2. 異文化の礼儀に関する二つの問題

水落（1995）はより良い異文化コミュニケーションのために異文化の礼儀を知るこの大切さをヴァイキングとフランク王国、スペイン軍とアステカ帝国、十九世紀初頭のイギリスと中国の異文化間の礼儀の衝突で説明している。何れのケースも異文化間に同一のシチュエーションに対して共通の礼儀の表現手段がないために、双方満足のいくコミュニケーションが図れなくなった例である。両方に折衷案もないために、一方の礼儀を採用すると他方は屈伏感を感じてしまう。相手に敬意を表して屈伏感を保留できるためには他方も同じ礼儀によって遇する保証があって初めて成り立つのである。それは同一文化内では満たされるが、異文化間では満たされにくい保証である。一般的に我々はコミュニケーションをギブ・アンド・テイクとみなしているが、このような場ではコミュニケーション自体の可能性が疑われてしまう。仮に一方の礼儀が無理に守られても、守った側の心理は相互の関係をまさに礼儀のレベルに留めておこうと思うものである。ここでは礼儀は虚礼とのみ把握されて、表面上のコミュニケーションはあっても相互理解を進める努力はもはや望めない。これが第一の問題である。

第二の問題に移る。異文化間の同一のシチュエーションで一方では礼儀があり、他方にはそのシチュエーションに関して礼儀が全くないことがある。日本文化が永年礼儀のお手本としてきた中国を例にとる。ここでは鳥田の挙げた二つの事例と説明を挙げてみたい。

日本人旅行者が中国でタクシーに乗った。運転手はメーターを動かさず、目的地についてから通常料金の10倍を請求した。これに対し日本人旅行者は、所持金が十分でない旨を述べると、運転手は半分にしてくれるというので喜んで料金を支払った。つまり最終的には5倍の運賃を支払うことになったのである。後にぼられたことを知り、この日本人旅行者は中国人の言うことを

信じられなくなった。

日本人旅行者が中国にある高級なレストランに入ってびっくりした。というのも、同じレストランに来ていた紳士然とした中国人が、出された料理がまずいからといってコックを呼び出し、これを作り直すよう命ずるのを目撃したのである。中国を「礼儀」の国であると思っていたこの日本人旅行者は、以来中国に対する認識を改めることになった（81頁）。

島田の主張は中国ではタクシーの料金とレストランの料理は交渉の範囲内にあり、日本では交渉範囲にない。だから礼儀を持ち出すのは場違いだということだ。自国文化にある礼儀、この場合は「交渉をしないこと」は異文化にもあてはまるとの思い込みが裏切られて異文化を礼儀のない文化と思う一般的な誤解の例である。そこにはもはや中国人が交渉行為で接客者対客の緊張を解し、コミュニケーションを楽しんでいると考えなおす余裕はない。因みに異文化に於いてはこの種のやりとりがコミュニケーションを楽しむ手段となっていることをよく見聞きする。小説家の五木はイランで骨董品を値切って買う方法を説明しながら、「ある時は俳優となり、ある時は学者となり、ある時は弁護士となり、そしてある時はビジネスマンとなり、さまざまな人生の役割を、物を売り買いするというたったひとつの舞台で演じきった満足感は、たとえようもないはずです」と賞賛している（89頁）。

このように異文化間の礼儀の持つ問題には少なくとも二種類あることが分かる。表現を替えて繰り返すならば、第一の問題は異文化の礼儀に習うことができてもコミュニケーションが礼儀を守ることに終始してしまうことである。第二の問題は異文化に全く礼儀がないと思込むことである。次に、より良い異文化コミュニケーションのために異文化の礼儀を知り、それを学習することの意義について概観する。

3. 異文化間における礼儀学習の困難

程度の差こそあれ礼儀に拘束されない者がいる。子供である。彼等は大人の

礼儀、「遠慮も礼儀のうち」の枠から外されて、日本社会に於いては「子供が遠慮するのはおかしい」と逆に思いのままに振る舞うように促される。この点で異文化の者はしばらく子供と似た立場に立たされる。彼等が来日そうそうに日本の礼儀を学ぼうとすると「彼等らしさ」がなくなるということで日本的礼儀を守らないことを期待される（一部の日本人にとっては彼等の天真爛漫さを異文化コミュニケーションの楽しさとも受け取る）。しかし、しばらくすると彼等は日本の礼儀を習得していると思込まれてしまう。このように、礼儀を学習することの第一の難しさは時間的な境界がはっきりしないことにある。

この例が示すのはホール（1973）の説明する学習の持つ三面性、テクニカル・ラーニング、フォーマル・ラーニング、インフォーマル・ラーニングである。ここではフォーマル・ラーニングとインフォーマル・ラーニングの二つを礼儀学習に当てはめて考えてみる。前者は人との接触なしの学習であり、後者は人との交わりの中でのみ可能な学習である。例えばある家庭に招かれて手土産を持っていく場面を想定してみよう。その品物の包装の仕方や、どのような挨拶の言葉を添えるべきか、誰に差し出すべきかは学習を要するが、作法の本を参照すれば学べることである（先述の格言を全うするのが容易であると感じられるのはこの面だけの礼儀を示しているからである）。しかし、インフォーマル・ラーニングは人と関り合う中でのみ可能な学習である。例えば、非言語的の礼儀として何時、どこで、誰にどの様に微笑むかである。この種の礼儀をマニュアルで学ぶことは不可能に近い。手土産を差し出しながら頭をどれくらい深く下げなのか、何回下げなのか、さらには、手土産を差し出すと同時に微笑むべきか。しかも、この一連の動作には「自然さ」が要求されるうえに、ここに機械的な流暢さがあるとはならないのだ。恐らく、自然かつ畏まった雰囲気醸し出さなくてはならない。この全てを受け手は「礼儀正しさ」と感ずるのだ。さらに、「自然な流れ」が要求されるということは礼儀が行為者の無意識の中に織り込まれることを意味する。例えば、ネウストブニー（1982）は「外国人とのコミュニケーション」の中で、日本人ビジネスマンが自分ではお辞儀をしていないと思っているにもかかわらず、相手方のオーストラリア人の方は日本人がお辞儀をしたと思っているという調査結果を紹介している。これを受けて荘

巖（1986）は「われわれの身についたお辞儀習慣の存在を示唆している」と解釈している。この解釈を砕いて考えるならば、礼儀行動とは往々にして無意識に表われることになる。よって、お手本となる者が自然に実演することが不可能なのだ。残された方法とは模倣する者がお手本となる者を幾度となくまじかに、正に無意識に織り込まれるまで見て反復実演しなければならない。その最適な時期とは幼少の頃である。しかし、成人した異文化の者は既に母国語の語意、発音体系、文法を持っているように自国文化の礼儀体系を持ち合わせているので、異文化の礼儀の学習中に個人の中で強い葛藤が生ずる。同時に、この葛藤の心理そのものが礼儀行動の自然さを妨げてしまうことになる。このように異文化の礼儀とはフォーマルな外国語学習のみで習得することは期待できない。まさに、礼儀の学習は異文化コミュニケーションで最も難しい問題だと言えよう。さらに、礼儀の衝突の問題の難しさは無意識の層における衝突であるために具体的に何と何が衝突しているのかが判然としない。その結果、異文化の礼儀の学習者は往々にして誤解の原因を異文化の排他性として一掃しがちである。このような誤った速断は次に見る異文化間の人間関係の悪循環が関与している。

異文化の者が日本に滞在して一日本人と親しくなる。出会いの初期には相手の日本人も客として彼を遇する。先述のように「遠慮しないように」ともてなされる。しかし、ある日彼は日本的礼儀を学んだものと思込まれる。当然この頃から客扱いが薄れることになる。当の日本人にしてみれば異文化の友人は既に遠慮を学んだものと思うのだ。しかし、礼儀を単に「敬意を表わす作法」とのみ理解している客は急に冷遇され始めたとはばかり思う。すると皮肉にも彼は再び敬意で遇してくれる新しい日本人との接触を求めるようになる。彼は再び客として遇されることになるが、そこに異文化を学ぶ機会などもはやあろうはずがない。彼はいくつかのこのような人間関係を経て巷で見聞きする日本人の単一言語・民族説を援用して「日本人は礼儀正しいが排他的である」という結論に至る。一般的に異文化の礼儀の習得の難しさはこのような人間関係の悪循環がつきまとっている。ならば、日韓の間の特別な問題はあるのか。次に検討したい。

4. 日韓の礼儀を学ぶことの難しさ

日韓の間には先述したことの一般的な難しさよりもさらに複雑な要因がある。地理的にも歴史的にも異なる日米間であれば異文化コミュニケーションに従事する以前にもそれ以後にも双方が礼儀の違いを当然だと思い、納得する余地がある。例えば、西田の研究(1991)は日本人がアメリカ人を選ぶ場合に失礼と思われると決め込んでいることが当のアメリカ人の生活自体にその様な習慣がなくとも失礼とは受け取らないことの事例を多くあげている。その一つに日本人は客を自宅に招く場合に店屋物を出すことを失礼だと思っているが、接客される側のアメリカ人はそうは受け取らない。文化は拘束力と許容力の両面を備えているのである。しかし、最も似ているものの間ではこの許容力も希薄になることが予想される。どちらか一方の礼儀が正しく、他方が誤りであると思ひ込む傾向があるのだ。この違いがいわゆる寸ぶんの違いであるならばなおさらのことである。違いではなくやはり、誤りと受け取られるのである。さらに両国の礼儀には礼教と呼ばれる儒教の要因が強い。厳密に言えば韓国は儒教を国教として日本は学問として取り入れた(加瀬、1988)。さらに、韓国は520年余の間儒教を国教とした。この史実から韓国の儒教的礼儀の取り入れは日本のそれより徹底していたことが窺えるし、日本がその点において韓国を師と仰いだこともあるだろう。いずれにせよ、両国の礼儀に類似点が多いのはそのためである。しかし、同時に韓国人が日本の礼儀を誤りだと誤解するのもそのためでもある。そのためか興味深いことは日本人より韓国人の方が礼儀正しいと思う日本人もいる。『儒教ルネッサンスを考える』と題されたシンポジウムで出たフロアーからの質問がそれだ。「韓国の方がむしろ社会道義的には日本より優れているのではないか。韓国の方がある意味では儒教的倫理が生きていて、礼儀も正しいし、特に家族というものが大事にされている...。』

先述の通り礼儀は無意識に実行されるまで学習されるために、微妙な違いを正すことは至難の業である。言葉の礼儀を例に取るならば日本語と韓国語には相対敬語と絶対敬語の違いがある。この違いを一言で言い表すならば、「日本人が韓国語で話をする時には如何なる時も年長者について言及する場合は敬語を使うこと」である。些細な違いのようである。しかし、実際に日本人が身内

の年長者、例えば、父親について述べる時に「私のお父様は…」と話すことには大きな心理的抵抗がある。謙遜というもう一つの日本の礼儀に反するからである。礼儀はこのように一個の形式が個別に存在するのではなく有機的に結び付いている。そのために、一部分だけを変えると他の一部との歪みが生ずることが常である。

バーナ(1988)はアメリカと他の文化間のコミュニケーションに生ずる誤解の原因となる要素六つを挙げている。「類似の思いこみ」(“assumed similarity”)、「言語」(“language”)、「非言語の誤解」(“nonverbal misinterpretation”)、「認知とステレオタイプ」(“perception and stereotype”)、「評価する傾向」(“tendency to evaluate”)、「高度な不安」(“high anxiety”)。この六つは決して単独に存在するのではなくそれぞれがお互いに影響しあっている。しかし、日韓の礼儀の学習者には特に「類似の思いこみ」と「評価する傾向」が最も強くなることが予想される。

5. 韓国の礼儀に関する所見

芥川賞受賞者李良枝の自叙伝的小説とも言われている「由熙」は在日韓国人の主人公由熙が韓国に留学し、帰国するまでの物語である。彼女の親しい韓国人女性が由熙のことを思い出してこう語る。

この国の学生は食堂の床にも唾を吐き、ゴミをくず入れに棄てようとしない、と由熙は言った。トイレに入っても手を洗わない、教科書を貸すとボールペンでメモを書き入れて、平気で返してくる。この国の人は、外国人だとわかるとタクシーに相乗りしても礼一つ言わない、足を踏んでもぶつかっても何も言わない、すぐ怒鳴る、譲り合うことを知らない… (75頁)。

由熙の韓国の礼儀にたいする結論は礼儀がないということだ。その点を他のデータと照合してみよう。佐桑は韓国人は日本人の様に頻繁に謝意を表さないと言う。最も緊密な間のコミュニケーションと言えば夫婦間であるが、そこにも一貫性がある。呉(1992)は日本人男性と結婚した韓国人女性の悩みを次のよう

に記している。

夫が私にバックを買ってくれたのよ。私はとってもうれしくて、「うれしい、うれしい」ってはしゃいだの。そうしたら彼は「ありがとうくらい言えよ」と怒った顔をして言うのよ。おかしいでしょ？ 夫が買ってきたものにありがとうなんて、まったく他人行儀じゃない。夫婦なのにね（25頁）。

さらに、この「ありがとう」は他人にもだしおしみされることがあるようである。呉（1994）は、日本人男性が見知らぬ韓国人女性に時間を聞かれて時間を教えてやると、彼女が礼も言わずにそのまま歩き去って行ったことを記している。柳は「東方礼儀の国」と称される韓国を礼儀正しい国と渡韓前は考えていたが、その後住んでみると逆であったとの感想を述べている。

感謝の気持ちを言葉で表わすことが礼儀ならば逆に謝罪はどうか。呉（1992）は自身と日本人の誤解が両国の礼儀の違いによることに気づいて次のように述べている。

韓国人は一般的に、自分が悪いことをして怒られているときには、無言でじっと相手の言うことを聞いていることが、「すまない」という心を表す姿勢としてよいものと感じている。お説教を聞きながら、「はい、すみません」などとは言わないものである。日本人にとっては、それが、「まるで反省の色がない」と感じられるのである（26頁）。

5-1. 韓国の礼儀の特徴（仮説）

筒井（1991）韓国の礼儀について次のようにまとめている。

私たち（日本人）が考えている「礼儀」という概念は、西洋の「エチケット」の影響をかなり色濃く受けているのではないだろうか。西洋では第三者の存在をつねに意識しながらふるまうことが求められているので、礼儀の概念もやはり「公衆のなかでの」礼儀に重きが置かれることになる。韓国の儒教概

念に基づく礼儀の概念とは、根本的に異なるのである。儒教道徳の基本は「長幼序あり」である。家臣は主君に使え、妻は夫に使える。しかしその人間関係の枠の外の人々、つまり「その他大勢」に対しては、ことさらに礼を尽くさなければならぬとはされていない（112頁）。

同じく李（1990）は韓国人の礼儀は儒教的な年長者への敬意を表すことには深い却不知道の人に対する礼儀は歴史的に浅いことを強調している。しかし、この二人の説明に補足されなければならない韓国の礼儀の特徴がある。近い間柄においては日本流の礼儀はむしろ解かれる方向に進行するというのである。さらに、社会的に親しい間または当たり前の関係と定義された仲、例えば夫婦間、ビジネス上の常連、偶発的に居合わせた者同士では、礼儀のやりとりはこれらの関係に長幼の序を組み込むことになり根幹にある儒教的礼儀にもとることになる。それは夫婦間、ビジネス上の常連、偶発的に居合わせた者同士の関係が別の関係に定義される危険性を孕むのである。

「由熙」の場面の礼儀に戻って再考する。「相乗りしても礼一つ言わない」のは偶発的に居合わせた者同士である。さらに、韓国ではタクシーの相乗りがよく普通である。そこに礼が入る余地はなかろう。もし、敢えて礼が交わされるのであれば親密な関係を持つとする意図がある場合であろう。「教科書にボールペンでメモを書き入れて、平気で返してくる」の箇所はどうだろう。この場合は、貸し借りそのものが親しさを互いに認めたことであり、メモは重要な箇所を記したまでではなかろうか。呉の出した時間を尋ねる例はどうか。やはり偶発的に居合わせた者同士の関係である。正にありがたい関係ではない。詫びの言葉が出ない例はこの仮説では解釈できないが、「すまない」では済まない非の認め方も想像できるのではないか。例えば、恐縮を無言で表わすことも可能である。

5-2. 日本の礼儀に関する所見

総じて韓国人の感想は日本人の礼儀を冷たく感ずるようである。日本の大学で教鞭を取る呉（1995）は韓国人にとって慎みが深ければ深いほど親しみが遠

ざかると述べている。日本に8年滞在した韓国人ジャーナリスト柳（1994）は最初の一年は日本人の礼儀正しさを評価したが時が経つにつれて逆の評価を下している。礼を述べることは礼儀の初めであり終わりとも言える程大切なことである。が、しかし荒木（1992）はそこに既に韓国人は日本人と異なる感覚があることを次の様に代弁している。

何かしてもらったときぺこぺこ頭を下げてお礼を言うなんて軽薄なことをするのはよくない。もともと余裕のある人間は困った人間を助けるのが当然だし、すぐに礼を言ってお返ししたりすると情が薄れる（52頁）。

「朝鮮を知る辞典」はお辞儀は日本人のように何回もするものではなく一回、しかし丁寧するものと記している。日本の大学で教鞭をとる金（1993）は日本人のお辞儀について、「コメツキバツタのようにお辞儀をくりかえされると、日本の習慣になれている私でも、身のおきばがなくて困る」と述べている（71頁）。また日本の大学で韓国語を教える渡辺（韓国人）は日本人のお礼の述べ方を座談会でこう述べている。「さかのほつてもいうでしょう。たとえば、なにかやっあってあげると、その一週間後に会っても、まだお礼をいう。さかのほつてお礼をいう習慣は、韓国にはないんですね」（59頁）。金（1984）は日本人の「親しき仲にも礼儀あり」についてこう語る。「...『親しき仲にも礼儀あり』とは堅苦しい。韓国人にいわせると、『礼があるのはあたりませじゃないか。何もわざわざそれをいい出さなくてもわかる。みずくさいじゃないか』とかえって嫌がられる」（157頁）。

在日韓国人三世の姜は韓国人（金先生）から韓国語を習っていた頃の思い出を次のように綴っている。「好意の申し出を受けても一度目は遠慮するものだと、私は教えられてきた。それをここ（金先生宅）ですると、実に残念で残念でたまらないような悲しい表情になる。いいのかなと思いつつも、この好意は素直に受けるべきと、私たちは結論を出した」（139頁）。日本の礼儀には「遠慮」が大きな地位を占めていることが分かる。因みに「甘えの構造」の著者、土居（1984）も初めてのアメリカ留学の際に日本的礼儀の遠慮について同じよ

うな経験をしている。この遠慮が日本の礼儀の重要な要素であることは日本人が依頼を断る際の言葉使いにも窺える。言下に断るのではなく、「遠慮させて下さい」の類の表現が礼儀正しいとみなされている。

5-3. 日本の礼儀の特徴（仮説）

韓国と比較して得られる日本の礼儀の特徴は先の項に戻ることになるが、長幼の序にないものまでに礼儀が及ぶ点である。社会的に親しい関係または当たり前の関係と定義された仲、例えば夫婦間、ビジネス上の常連、偶発的に居合わせた者同士までに及ぶ点である。このような人間関係の中に礼儀を組み込むことによって常にその関係が新鮮に定義され直されるのではないか。夫婦の中での「ありがとう」は一瞬にせよ慣れ合いを新鮮なものに感じさせるのではないか。友人間で何度も感謝や謝罪の言葉が行き交うのも緊張をもたらし、新鮮さを維持できるのではないか。この緊張は礼儀の導入自体、それと「親しき仲にも礼儀あり」の諺からも窺えるのではないか。偶発的に居合わせた者同士の礼儀はどうだろう。日本文化においては偶発的な出会いも単にそのまま「何でもない関係」としてではなく、「袖振れ合うもなにかの縁」のようにある特別な関係と捉え直されているのではないだろうか。そこに細やかな礼儀、または親切が入る余地が生ずる。

6. まとめと課題

異文化コミュニケーションにおける礼儀のもたらす問題は単に礼儀のレベルの問題ではないことが分かった。一般的な問題は二つある。第一に、あるコミュニケーション場面で双方の礼儀の表現方法が異なる場合がある。この場合、仮に一方の表現方法が取り入れられても、コミュニケーションを礼儀のレベルに留めて深いレベルまで深化させない可能性がある。第二に、ある同一の場面は一方にとっては礼儀の適用範囲内ではあるが、他方にとっては範囲外であることがある。この場合往々にして異文化は礼儀の無い文化だとして誤った速断が下されがちである。さらに、これとは別に日韓の礼儀は特殊な異文化コミュニケーションの問題を潜在的に持っている。お互いに地理的にも文化的にも類似

点が多くお互いを異文化と意識できないこと。さらに儒教的礼儀の採用という共通項目をもっていること。この二つが相俟ってどちらか一方の礼儀が正しく、他方は誤りであるとの意識がつきまといがちである。礼儀は行為者の無意識のレベルに織り込まれるがゆえに、異文化コミュニケーション上の礼儀の衝突は具体的に何が原因しているか判然としないことが多い。

韓国人から見た日本人の礼儀は始めは礼儀正しく見えるが、お互いの関係が深まりつつある時期にくるとむしろ逆に冷たく空々しいものとして写るようである。一方、日本人から見た韓国人の礼儀は関係の初期にこそ共通点はあるが、お互いの関係が深まりつつある時期になると礼儀が無くなり馴れ馴れしいと写るようである。しかし、この認識の食い違いもそれぞれの礼儀の価値と特徴を把握することで再認識することができる。仮説の域に留まるが、韓国人の礼儀は「長幼の序」を根幹としていてその枠外の間人間関係においてはむしろ礼儀が解かれる方向に進行する。また、日本人の礼儀は「長幼の序」の枠外の者にも及び、その者との人間関係に礼儀の導入をもって新鮮さを保っている。このような特徴の理解を抜きにしておいて日韓コミュニケーションの誤解の原因の検討を進めても、一方の国が礼儀正しく他方の礼儀が誤りだとの堂々めぐりに陥って相互理解は望めない。

課題としては、ミクロな個別の礼儀の比較研究の必要性が残る。現時点では「日本・韓国・台湾比較文化辞典5」や「朝鮮を知る辞典」が上梓されているが、いづれも礼儀に関する項目は日韓の礼儀が大同小異であるとの印象を残すのみに終わっている。おそらくこの種の比較は日韓のコミュニケーション・パートナーの出会いの初期にのみ焦点を置いているため、このような結果になったのであろう。将来の比較研究は人間関係が深化していくにつれて双方の礼儀がどうなるかに焦点をあてなければならない。さらに、先述の西田(1991)の研究に習って実際どこまでの礼儀の違いをお互いが許容できるのかの実証的研究も残されている。

参考文献

- 荒木和博（1992）『愛し哀しき韓国よ』.
- Barna, L. B. "Stumbling Blocks in Intercultural Communication," in Intercultural Communication Reader, ed. Larry A. Samova and Richard E. Porter (Belmont California: Wadsworth, 1988), pp. 322-330.
- 『朝鮮を知る辞典』（1992）平凡社.
- 土居健郎（1984）『「甘え」の構造』弘文堂.
- 古田暁（監修）（1991）『異文化コミュニケーション・キーワード』有紛閣双書.
- Hall, E. T. (1979) *The Silent Language*. Anchor Books, New York.
- 平井久志（1993）『ソウル打令』徳間書店.
- 石井敏・岡部朗一・久米昭元（1991）『異文化コミュニケーション』有斐閣選書.
- 五木寛之（1995）『生きるヒント』文化出版局.
- 金山宣夫（1988）『日本・韓国・台湾比較文化辞典 5』大修館書店.
- 加瀬英明（1990）『「恨」の韓国人「畏まる」日本人』講談社.
『広辞苑』
- 金容雲（1984）『鎖国のパラダイム』サイマル出版会.
- 姜信子（1992）『ごく普通の在日韓国人』朝日文庫.
- ネウストプニー, J. V. (1982) 『外国人とのコミュニケーション』岩波新書.
- 西田ひろ子（1991）『実例で見る日米コミュニケーション・ギャップ』
大修館書店.
- 溝口雄三・中島嶺雄（編）（1991）『儒教ルネサンスを考える』大修館書店.
- 大鹿譲、呉満、小林路義（編）（1995）『体験的異文化コミュニケーション』.
泰流社.
- 呉善花（1992）『続スカートの風』三交社.
_____（1994）『向かい風』三交社.
- 李良枝（1989）『由熙』講談社.
- 佐野正文・水落一朗・鈴木龍一（1995）『異文化理解のストラテジー』大修館.
- 島田裕已編（1991）『異文化とコミュニケーション』日本評論社.

・ 莊巖舜哉（1986）『ヒトの行動とコミュニケーション』福村出版.

筒井真樹子（1991）『ソウルのチョッパリ』亜紀書房.

柳在順（1994）『下品な日本人』作品社.

Summary

Courtesy in Korea and Japan in Relation to Intercultural Communication

Kanemoto, Madoka

The aim of this paper is to explicate often neglected problems of courtesy in relation to intercultural communication between Koreans and Japanese. Anecdotal data show that Koreans misunderstand Japanese courtesy and vice versa. These cultures share much in common historically and culturally. This often deludes intercultural communication partners to perceive that courteous behaviors on one side as authentic, and the other side as anomalous. Therefore, a tentative answer to this perceptual problem is to extract underlying values and principles on each side of courtesy systems. Within Korean culture, Confucianists' teaching of seniority (*choyo no jo*) is still operating strongly. However, courteous behavioral restrictions tend to be abandoned among interpersonal relationships other than a senior-junior relationship. The value of this freedom is not to confuse a senior-junior relationships with other relationships, which enables the latter to stay intact. Within Japanese culture, the same principle is still at work. However, courtesy among all relationships seems to remain. The value of this restriction is to redefine existing relationships from a refreshing perspective.